

## MDMA “ecstasy” の流行とその有害性

### § はじめに

近年エクスタシーと呼ばれる合成麻薬 MDMA の乱用が世界的に増加しています。我が国でも、その乱用が特に若年層において流行しており、社会的に問題となっています。巷では「MDMA は覚せい剤より身体的に害が少ない」という俗説があり、それが若者に MDMA を使用させる原因の一つになっているようです。

また、MDMA は錠剤として出回っており、押収された MDMA の写真をみますと絵文字の刻まれたカラフルなもので、覚醒剤の結晶のようなおどろおどろしさを感じさせません。それが安全な印象を与え、また、錠剤のため医薬品であるかのような印象もあることから、警戒心が薄れて容易に使用してしまうのかもしれませんが、覚醒剤に匹敵するくらい危険な違法性依存薬物です。

数年前、ある有名俳優がホテルで同伴の女性と MDMA を使用し、同伴の女性が死亡した事件がありました。その俳優は、MDMA を使用したことに加えて、MDMA を一緒に飲んで死亡した女性の救命を怠ったとして保護責任者遺棄の罪でも訴えられ、一審、二審で懲役2年6か月の実刑判決を受けました。彼は量刑に対して不服があり控訴しましたが、2012年2月最高裁で彼の控訴は棄却され、判定が確定しました。本項は、この裁判のことを紹介することではないのでこの話はこれでやめますが、公開されている情報ですのですぐ調べられます。いずれにしても、MDMA は、その使用は違法ですし、時に死亡に至るほど害のある薬物であることを強調しておきたいと思います。

### § MDMA の歴史

MDMA は、1912年にドイツの「メルク」社によって食欲抑制薬として開発されました。しかし、臨床に応用されることはなく、長く注目されることはありませんでした。

1950年代、アメリカ陸軍で MDMA の効能がテストされたという報告があります。それは捕虜を洗脳する目的で MDMA を使用しようとする目論みだといわれていますが、その後、軍で MDMA が正式に使用されていないところから、軍の目的は失敗したようです。1958年、フランスのスミス・クライン社が MDMA の代謝物を食欲抑制剤として使用できないか試みますが、MDMA の有する依存性のため、食欲抑制剤としての使用を断念しています。

MDMA が脚光を浴びるのは、1980年代になってからです。1980年代、アメリカのナイトクラブではじまったドラッグパーティがイギリスにも波及し、そこでさまざまな薬物が使用されました。特に MDMA を服用すると、多幸感が得られるため、レイヴといわれる野外のダンス・パーティにはうってつけの薬物で欧米では若者に急速にひろまりました。MDMA は、中国では「搖頭丸」といわれていますが、その由来は MDMA を服用すると狂ったように興奮し、音楽に合わせて激しく頭を振り回し続けるという特徴からきています。

このように、若者の間で広まった MDMA ですが、後に述べる有害作用があることから、1985年アメリカでは、連邦麻薬取締局によって非合法ドラッグに規定されました。我が国では、1990年麻薬及び向

精神薬取締法の改正により、MDMA は非合法ドラッグに指定されました。

一方、MDMA は、服用するとリラックスした状態となり、他者に対する親近感とコミュニケーションの解放化の作用があることから、1970年代からアメリカの一部の治療者たちは PTSD（外傷後ストレス障害）の治療に用いてきたという歴史もあります。現在ではほとんどの国で MDMA は違法薬物に指定されていますが、MDMA を医療に用いたいという一部の熱心な治療者たちにより、米国食品医薬局に PTSD 患者や治療抵抗性の不安障害患者に対して MDMA の使用の許可を求める動きがあります。しかし、依存性の高い薬剤であることを考えますと、医薬的使用はきわめて難しいものと思われれます。

## § 我が国における MDMA の流行

厚生労働省が公表している 1998 年から 2007 年までの MDMA の乱用者数と押収量を図に示しました。2000 年に入り、MDMA が我が国に本格的に流入したことが分かります。その乱用者は、2005 年をピークに漸減していますが、押収量は 2007 年に急増しています。今後なお、MDMA の乱用にはより関心をもってみていくことが必要と思われれます。

## § MDMA の薬理作用

MDMA の正式名称は、3,4-methylenedioxymethamphetamine です。日本で戦後より長く流行し現在も社会問題化している覚醒剤は、正式名称はメタンフェタミン methamphetamine であり、構造式が MDMA に類似しています。我が国では、MDMA は法律的に合成麻薬として「麻薬取締り法」により規制されていますが、構造式や薬理機序からは覚醒剤の一種と考えていいと思います。ちなみに、覚醒剤は「覚醒剤取締り法」により規制されています。

覚醒剤は、脳内のセロトニン濃度よりもドパミン濃度をより増加させるのに対して、MDMA はドパミン濃度よりセロトニン濃度を増加させるといった違いはありますが、両者とも脳内のドパミン、セロトニン、ノルアドレナリン、その他の神経伝達物質を著名に増加させ、さまざまな有害事情きたす原因となります。

## § MDMA の臨床症状

MDMA を使用しますと、精神的には不安緩和、刺激・情動興奮、幻覚、環境体験の変化、意識喪失、視覚異常、触覚異常、聴覚異常などが認められます。身体症状としては、食欲低下、高血圧、肝障害、不整脈などを認めます。大量に使用しますと、けいれん、横紋筋融解、低 Na 血症などを生じ、さらには 40℃を超える高熱が認められます。

どの身体症状も危険ですが、特に高熱は死亡の原因となります。MDMA は、ダンスパーティーで使用されることが多いため、MDMA そのものの高熱誘発作用に、使用者が密集した環境のなかでひたすら動き回るといった条件が加わり、体温上昇の程度はより高まります。

MDMA を長期に使用しますと、記憶障害、認知障害、幻覚、抑うつ、離人症状、パニック症状、睡眠障害などが生じると報告されています。MDMA はセロトニン神経系に親和性が高いことから、MDMA の長期使用によるセロトニン神経系の障害が上記の臨床症状の原因の一つと考えられています。